　　　　　　　　「Take my hand」

　髪に白いものが目立つ紳士が、ケーキ屋のウインドウを見つめていた。12月23日の午後1時、冬の穏やかな陽光がクリスマスケーキを照らしている。大きさが三種類あるのだが、中と小に要予約と印刷された値札に売り切れのシールが張ってある。ふと視線を感じた紳士は、店の中を見た。中年のパテシェが、こっちを見ていた。パテシェは、ガラスのドアを開けて言った。  
「どうぞ、中へ」  
　紳士は、戸惑いながらも店に入った。視線が定まらない紳士にパテシェは言った。  
「イブは、どなたとお過ごしで」  
「いや、妻と二人きりなので、小さいので良いのだが」  
　パテシェは、紳士の肩越しに外を見た。向かい側の建物を見下ろすように、大学の時計台が見える。  
「では、何か作りましょうか。クリスマス用の材料が、予定どおりこなくて、三時まで暇なのです」  
　紳士は、腕時計を見た。その時、携帯電話が鳴った。紳士は、  
「失礼」  
　と言って、電話を取り出した。相手は、部下のようだ。  
「ああ、竹下君か。なんだね。何、本当かね。・・・・、直ぐに戻る」  
　電話を切った紳士は、パテシェに名刺と二千円を渡して言った。  
「これで、何か作ってもらえるかな。後で取りに来る」  
　名刺には、Ｋ大教授、岡崎光久とあった。  
「あっ、大学の先生ですか」  
「では、よろしく頼みます」  
「はい、承知しました」  
　岡崎は、軽く肯いて店を出た。  
  
　急いで大学に戻った岡崎は、微生物研究室のドアを開けた。研究室では、助手の竹下がビーカーを見つめていた。竹下は、岡崎に言った。  
「適当な水槽がなかったので、これに入れました」  
　小さなおたまじゃくしが、ビーカーの中で元気良く泳いでいた。  
「いったい、何が起こったのだ」  
「はい、栄養剤と間違えて、ＴＳＫウイルスの粉末をカエルに飲ませてしまいました。すみません。」  
「それは、まあ良い。あのウイルスは、特に害がないはずだ。で、どうなった」  
「ちょっと目を離していたら、おたまじゃくしになっていました。全部、ビデオに撮ってあります。」  
　ビデオを再生しようとした岡崎を竹下が止めた。  
「先生、奥様を迎えに行かないと」  
　手を止めた岡崎は、竹下に言った。  
「そうだな。それに君も休暇だったな。これは、家に持って帰るよ」  
　竹下は、気まずそうに答えた。  
「良いんですか、すみません。では、箱を用意します」  
　頼むよ・・・と言いかけた岡崎は、研究室のドアが少し開いていることに気が付いた  
。隙間から、若い女性の影が見える。  
「竹下君、もう良い。行きなさい。彼女を待たせたら悪い。さあ、ここは良いから」  
  
　いそいそと研究室を出る竹下の背中を目で追う岡崎は、ふと昔の自分を思い出した。まだ、学生だった頃に妻の慶子と出会った。慶子は、八歳年上だった。子供は、娘が一人いた。知恵と名付けた。七年前、大学に入ったばかりの娘は、交通事故で命を奪われた。娘を亡くしてから、家は火が消えた暖炉のように暗くなった。ある日の早朝、慶子がタンスの引出しを全て引き出していた。印鑑が見付からないという。出勤前の岡崎は、時間を気にしながら、一緒に探したが、どこにもなかった。結局、印鑑は玄関に転がっていた。数日後、仕事中に慶子から電話があった。頭が痛いから、帰りに頭痛薬を買って来て欲しいという。その数分後、また同じ内容の電話。慶子は、「あら、さっきも  
電話しましたか。最近、物忘れがひどくなったわ」と笑った。翌年、近くの交番から電話があった。慶子は、道に迷ったという。翌日、医学部の友人に診てもらったところ、アルツハイマーと診断された。それから、年々悪化する症状に耐えかねて、岡崎は慶子を施設に預けた。  
  
　岡崎が施設に着いた時、車椅子に乗せられた慶子が医師に付き添われて待っていた。  
「慶子、待たせたな」  
慶子は、何も言わない。もう、岡崎が誰だか分からなくなっている。医師は、岡崎に言った。  
「両手を持って上げたら、なんとか歩けます」  
「はい、お世話になりました」  
　医師は、慶子の肩に触れて言った。  
「慶子さん、お正月はご主人と一緒で良いですね」  
　慶子は、岡崎を見上げて手を伸ばした。岡崎がその手を取ると、ゆっくりと慶子が立ち上がった。医師がもう一度言った。  
「慶子さん、歩きましょうね」  
　慶子は、そろりと歩き出した。  
  
　家に着くまで、慶子は大人しく助手席に座っていた。岡崎は、慶子を布団に寝かせた。  
「ちょっと待っていてくれ」  
　そう言って、おたまじゃくしを入れたビーカーを車から降ろして、書斎の机に置いた  
。そして、慶子の傍に寄った。においがする。  
「ああ、オムツを変えよう」  
　オムツを変えている間、慶子は黙って天井を見ていた。その視線が、テーブルに置いたケーキの箱に止まった。  
「ああ」  
　慶子が箱を指差した。  
「あれは、明日だよ。そうか、腹が減ったか」  
　台所に立った岡崎は、冷凍のクリームコロッケを冷蔵庫から取り出した。クリームコロッケは、慶子の得意料理だった。  
「すまんなあ、おまえのように作れないから、冷凍で我慢してくれ」  
  
　食卓には、クリームコロッケと惣菜屋で買ったヒジキが並んだ。岡崎は、コロッケを少し冷まして慶子の口に運んだ。慶子は、美味しそうに食べた。コロッケを三つ食べた慶子は、満足したように横になった。  
「もう良いのか。まだ、コロッケはあるよ」  
　慶子は目を閉じていた。岡崎は、妻の寝顔を見ながら、冷めたコロッケを食べた。娘が生きていれば、孫がいるかもしれない。岡崎は、唇を噛んだ。この先、ずっとこうなのだろうか。妻が寝息を立てている。  
　岡崎は、書斎に戻ってビーカーのおたまじゃくしを見た。変化は、ないようだ。岡崎は、研究室から持って来たビデオカメラをセットした。  
「あう」  
　慶子の声だ。慶子は、布団の上に座っていた。  
「どうした」  
「ジュス、ジュース」  
「喉が乾いたのか。ちょっと、待ってろ。」  
　岡崎は、冷蔵庫からオレンジジュースを出した。しかし、慶子が首を振った。  
「オレンジじゃだめか。しょうがないないな。何か買ってくるから、大人しくしてろよ」  
　岡崎は、急いで近くのコンビニに走った。そして、何種類かの小さなパック入りジュースを買って戻った。  
「ただいま、いっぱい買って来たよ」  
　妻がいない。書斎で、何かが倒れる音がした。岡崎は、書斎に飛び込んだ。慶子は、彼の顔を見て笑った。口と襟が水で濡れていた。カメラの三脚が倒れている。床に転がったビーカーには、おたまじゃくしの姿がなかった。  
「ああ、してみろ」  
　岡崎は、慶子の口を覗き込んだ。おたまじゃくしを飲み込んだのだろうか。  
「おいおい、あんなのマズイだろう。まあ、害はないと思うけどな。とりあえず、着替えよう。」  
　その夜、岡崎は妻の横で眠った。  
  
　早朝、まだ空が暗い。新聞配達の音に目が覚めた岡崎は、手を伸ばして妻の体に触れようとした。妻の体がない。飛び起きて、蛍光灯を付けた。灯りの中に、信じられないものがいた。赤ん坊だ。パジャマの中で、赤ん坊が動いている。呆然とする岡崎は、我が目を疑った。岡崎は、そっと手を伸ばした。赤ん坊は、それから逃げるように、ごそごそとパジャマの中から這い出た。  
「これこれ、どこへ行く」  
　岡崎は、赤ん坊を抱き起こした。赤ん坊は、手足を動かして笑っていた。  
「おまえ、慶子なのか。そうだ、慶子は尻にホクロがあった」  
　赤ん坊の尻にも、同じホクロがあった。  
「やることが、山ほど出来たようだな」  
　岡崎は、赤ん坊をダウンジャケットに包んで、コンビニに向かった。紙オムツ、ミルク、哺乳ビン、ベビーオイル、パウダーを買い込んで家に戻った。体を洗い、ミルクを与えて、落ち着いたのは昼前だった。  
「ふう、ああ腹が減った」  
　ダウンジャケットの中にいる赤ん坊を見つめた岡崎は、改めて赤ん坊を抱きしめた。  
「慶子、だよな。あとで、服を買いに行こうな」  
　慶子が笑った。  
「あう」  
「そか、うれしいか」  
　  
　夜、岡崎は小さな慶子を抱いて、ケーキのローソクに火を灯した。  
「ああ」  
　慶子がケーキを指差した。岡崎は、クリームを少し口に入れてやった。岡崎も一口食べた。慶子が、小さな欠伸を一つ。  
「眠いか」  
　岡崎は、慶子を抱いて布団に入った。彼もそのまま眠ってしまった。忙しいイブが終わった。翌日、慶子を連れて近くの公園に散歩に行った。昨夜もらったなのだろう、子供達が玩具を見せ合っている。  
「ウエーン」  
　慶子が泣き出した。岡崎は、オムツに指を入れたが、濡れていない。ミルクは、さっき飲んだから、お腹は減っていないはずなのだが。ともかく、泣く慶子を連れて家に戻った。岡崎は、娘が赤ん坊の頃を思い出してみた。そう、そうだ。風呂だ。娘は、風呂が好きだった。風呂に入りたいときに、良く泣いていた。  
　岡崎は、慶子を抱いて風呂場に入り、給湯器のスイッチを入れた。慶子は、それだけで泣き止んだ。そうか、娘の風呂好きは、母ゆずりだったのか。岡崎は、久しぶりに赤ん坊と湯に浸かった。そっと慶子を洗ってやる。慶子は、気持ちよさそうに体の力を抜いた。そして、岡崎は誰もいないのに、  
「おおい、あがるよ」  
　と言って、立ち上がった。ああ、俺一人だったな。風呂から出て、慶子の体を拭いてやった。すっきりしたのか、慶子は眠った。慶子を布団に寝かせた岡崎は、近くの自然食品店に走った。そこで、ベビーフードを買った。慶子は、二時間ほどで目覚めた。岡崎は、慶子にベビーフードを与えた。美味しそうに食べる慶子。忙しいクリスマスは、楽しく暮れて行った。  
  
　翌朝、まだ慶子は眠っていた。岡崎は、新聞を取るために玄関に向かった。その時、書斎からカエルの鳴き声が聞こえた。まさか、そんなこと。書斎に入った岡崎は、床で跳ねるカエルを見つけた。  
「嘘だろ」  
　そう言って、寝室に走った。そこには、赤ん坊ではなく、本来の慶子が寝ていた。慶子は、赤ん坊のような笑顔で手を伸ばした。  
「ああ」  
　岡崎は、笑顔で慶子の手を取った。  
「同じだよな。赤ん坊も今の慶子も。泣いたりわめいたり、オムツが必要だし、風呂に一人で入れないし。年が明けたら、退職願いを出してくるよ。ずっと、一緒にいよう」  
  
　良く晴れた日、慶子は公園のベンチで岡崎のヒザに乗っていた。暖かい日差しが二人を包んでいる。ベビーカーに子供を乗せた近所の主婦が、二人の傍に寄って言った。  
「こんにちは、良いお天気ですね」  
　慶子は、少し照れながら答えた。  
「ええ、とても暖かいわね」  
「はい、では失礼します」  
　主婦は、ベビーカーを押して離れて、同じような子供連れの輪に入って行った。  
「岡崎さん、また、赤ちゃんごっこしているのね」  
「そうみたい。」  
「ねえ、ねえ、それってなに」  
「あら、知らなかったの」  
「奥さんも大変ね。娘さんが亡くなってから、ご主人がおかしくなったのよ」  
「でも、なんだか楽しそうね」  
「そう、奥さんが言ってらしたわ。幼い子供だと思えば、どうってことないって」

　　　　　　　　　　　　　　　　完